

## 第2回 口丹地域における府立高校の在り方懇話会（概要）

- 1 日 時 平成30年1月30日（火）午前10時～正午
  - 2 場 所 クアスポくちたん 大会議室
  - 3 出 席 者 26名  
府教育委員会 前川教育監、井上高校教育課長、  
相馬高校改革担当課長ほか
  - 4 概 要  
(1) あいさつ  
(2) 説明  
(3) 意見交換
- 

### ■説 明

□府教育委員会：資料説明

### ■意見交換（主な意見） ○：出席者 ◆：府教委 ◇：進行

- 北桑田高校の森林リサーチ科についてだが、検討会議の資料を見て地域の皆さんの高校の存続への熱い思いが伝わってきた。また、高校では現在でも大変ユニークな教育活動をされており感心している。私はかつて京都府で林業職に数十年携わってきたが、一緒に働いた同僚等にも同校の卒業生で立派な方々が多くおられた。最近では、森林リサーチ科の卒業生のほとんどが進学希望で、すぐに林業関係に就職される数は少ない状況である。林業の就職等の厳しい現状からすればやむを得ないが、手入れがなかなか行き届かない森林が増えてきていることもあり、国においても森林環境税を導入するなど森林保全に向けた動きがある中で、森林整備に携わる人材の確保が大きな課題になってくる。景気が上向くと林業関係への就業希望者が少なくなるのは昔からの傾向だが、きちんと日本の国土を守っていくためには今後とも人材をしっかり確保していく必要がある。北桑田高校の森林リサーチ科存続のための真剣な議論をお願いしたい。通学圏の課題もあって難しいかもしれないが、人口が減っていく中において特別な学科を維持していくためには、全国募集という視点も考える必要があると思う。ぜひ京都府からそういう新しい改革を打ち出してほしい。
- 農業についても林業と同じく非常に厳しい状況である。最近は農業をビジネスにしようという方も増えているが、まだまだ高齢層により支えられている状況である。口丹地域については農業を学ぶ高校が複数あり、農業協同組合としては非常に嬉しく思っている。また、食育の取組として小・中学校への出前授業をさせていただいており、若い頃から農業に触れる機会を増やすことで農業教育が盛んになっていけばという思いで頑張っている。特に高校は、進路を決めていく場でもあるため、地域に必要な人材を残していくためにも農業を学ぶ高校があることは強みである。ぜひこうした専門学科を存続していただく高校教育の在り方を検討いただきたい。農業は、作物が気象災害を受けると価格が高騰するといった不安定さはあるが、技術も発達して工場でも野菜ができる時代になってきている。そのため、若い世代から農業と触れ合える教育をぜひ行ってもらえると嬉しいし、それが地域を守ることにもつながると思う。

- 親の立場からは、子どもたちが今後、高校に入り就職するまでに専門的な知識も必要になってくるかと思う。そうした学びを選択しやすいよう、高校にも取り入れてほしい。子どもの立場で考え、より一層勉強をしやすい環境づくりをしてほしい。
- 中学生の子どもがいるが、専門学科への進路を考えており、家族でいろいろと話している。やはり普通科も大事だが、専門的な学びもまた必要だと常々感じている。一方で、数年前、学生の就職難が騒がれていた時のニュースで、「学生はテレビCMなどで有名な、名前を知っている会社しか希望せず、中小企業の希望者が全然いない。」という報道を目にした記憶がある。専門学科に進んでも、将来がどうなるかが不透明なままでは、親としても子に勧めにくい部分もある。専門学科を出ればどのような進路があり、どのような将来が待っているのかわかるように広報してもらえれば、専門学科ももう少し充実していくのではないか。
- 地域の生徒の減少についてはやむを得ないことなので、他地域から呼び込むことを考えるべきではないか。また、地域の高校への進学について、亀岡地域は京都市内の高校に行く生徒が非常に多いと聞いており、これに歯どめをかける方法はないかと、来年6月頃開催の管内の高校の合同説明会においてPTAのブースを用意してもらい、高校には直接聞けない話もできるような場を設けることを考えている。私の子どもが高校を選んだ理由を考えると、制服が良いからとか、成績が良いとか悪いとか、様々な要素で決めていくわけだが、実際にはほとんど差はないと思っている。にも関わらず、噂や薄い情報だけを頭に入れて勝手に決めてしまっていたのではないか。学校のアピールをもっとしていくことが大事だと思っている。地元の間が地元の高校に通うのは当たり前なことだと思うし、高校の説明会では口丹ブロックのPTAとして取り組んでいきたい。こうした取組を数多くしていかないと、地元の高校の良さをアピールしていく機会がないと思う。機会をより増やしてもらいたいし、学校だけでなくPTA連合会をもっと使っていただく場も持ってほしい。単に学校公開をするのではなく、もっと深く知ってもらうような形で学校に来てもらう取組として、小・中学校にも依頼して高校を全て回ってもらうというようなことも日常的に行えば良いのではないか。予算がなくてもPTAに依頼すればみんな行ってくれる。大きな声を出していけば実現できると思うので、ぜひとも声かけをお願いしたい。

◇ 中学校の立場から、今の生徒の進路選択の状況についてどうか。

- まず、各市町に少なくとも1校の公立高校が必要であろうと思っている。京丹波町にとって須知高校の必要性は大きい。地域創生で町を挙げて人の誘致をされている。人を呼び込む上で、その地域の教育環境として学校があるかどうかは選ぶ視点において非常に大きいと思う。やはり地元に着した高校が必要である。また、他通学圏から生徒を呼び込むには、特色という点で専門学科の力は非常に大きいですが、地元の生徒をどれだけ集めるかは普通科の存在による。中学3年生と面談をすると、この段階で将来を決めて進路選択をしている生徒は非常に少ない。そのため、今後の可能性を広げる大学進学のことも見据えると、地元で普通科がある意味は大きいと考える。併せて、口丹地域の事情として交通のアクセス、費用の問題もある。また、北桑田高校美山分校についてであるが、果たしている機能は非常に大きいものがある。不登校経験があったり、発達障害のある生徒たちが、昼間定時制という場でゆっくりとストレスを感じずに社会的自立に向けて頑張っていく場、もしくは学び直し学習を進めていける場として、現在分校が果たしている機能は何らかの形で残していただきたい。中学校と高校の橋渡しとして学びの連続性を担保したり情報を共有するための教員の加配配置がされているが、今後とも配置が必要である。

○ 亀岡市内の中学生の現状として、アクセスのしやすさから多方面に進学しており、中でも多くの生徒が京都市内に行っている。また、現行の選抜制度とも関係があると思うが、生徒が早く進路を決めたいという動きが顕著である。そのため、2月初旬の私学の入試や公立高校の前期選抜に集中する。以前は3月の中期選抜が中心であったが、より早く進路先を決めたいという動きが生徒、保護者の重要なポイントになっていると考えており、その動きについて考慮する必要があると思う。また、口丹地域に限らず全体として中学生数が減っていることで、どこの高校も生徒獲得に必死になっていることを考えると、地域として生徒、保護者の気持ちを掴んでいくためのアピールが必要になると思う。地域として高校の存続は非常に大きな問題であるため、それとどう絡めて中学生を他から呼び込むか、アイデアを出していく必要がある。

○ 京北地域では約220km<sup>2</sup>と非常に広大な区域から生徒が通っており、現在もバス等を使って、遠いところでは約30分かけて通っている状況である。そうした中で、もし北桑田高校がなくなれば、さらに1時間ぐらいかけて別の高校まで通わなければならない、不可能に近い。無理をして通っている生徒もバス代が非常に高く、3年間で100万円近く交通費がかかる。また、美山分校については京北、南丹地域において不登校の生徒がじつくりと落ち着いて学べる唯一の学校として、ぜひとも存続してほしい。地元にある北桑田高校に対し地域を挙げて存続への支援をしていく大きな動きもある。

一方、生徒のニーズに関していうと、生徒の進路選択の幅は非常に広く、北桑田高校以外の学校に行きたい、街中にある専門学科に行きたいという子どもも少なからずおり、これをゼロにはすることはできないと考えている。そこでどうしていくかであるが、一つ目は、現在北桑田高校の校長先生が生徒のニーズに応える学校づくりを目指し一生懸命様々な提案をされているような学校の魅力づくりであると思う。二つ目は、通学圏の問題として、今後、口丹通学圏から京都市・乙訓通学圏に変えることを考える時代がやってくると思うが、現状で通学圏を完全に変わると、圧倒的に街中に出て行く生徒が多くなってしまふ。そう考えると、街中からどうやって呼び込むかの視点が必要だと思う。京北地域の生徒が行きたい高校であると同時に、京都市など他地域の生徒も行きたい高校としてつくっていくことが大事である。今回の選抜から、京都市・乙訓通学圏内の中学校から前期選抜で10%の枠を設定されたが、これが広がって人気が高まっていくことに期待したい。

通いやすい道路の整備やJRバスの運賃問題など通学面の課題、また、地域からの転出が多いという課題に対しては、高校など教育現場の取組だけでなく、町づくりとしてもっと大きな動きが必要であり、セットで考えていかなければ絶対に成功しないと思うので、行政にももっと頑張ってほしい。

また、街中の高校と良い繋がりを持つ生徒に影響されて、他の生徒もまとめて出て行くというケースもあることから、人の繋がりというのはとても大切にすべきである。そのため、地元の周山中学校と北桑田高校とで普段の生徒同士の繋がりを今後一層大事にしていく必要があると感じる。京北地域では平成32年度に小中一貫校の開校を目指しているが、府と市で一層連携して小中9年間と高校教育の3年間を合わせた12年間で子どもをどう育てていくかという視点を考える必要がある。

○ 教育、文化スポーツ地域活動、産業や雇用等さまざまな場面で府立高校との関わりがあり、実感として府立高校は地域に欠かせない重要な社会基盤ではないかと思う。管内で府平均を上回る少子高齢化が進んでおり、人口減少が進行する中で、将来的にこの管内だけで生徒を確保していくことは厳しいと感じているが、今後も持続可能で活力ある安心安全な地域づくりを進めていくためには、少子化対策、経済・雇用対策、移住定住といった地方創生の取組を強めていく必要がある。中でも、府としては教育など人づくりが最も重要と思うし、基盤となる学校の機能が失われ

ると地方創生は進まない。こうした中で府立学校の在り方を考えると、まず生徒に選ばれる、魅力ある学校づくりを積極的に進めていただく必要がある。管内からの進学を増やす意見もあるが、管外からも来ていただくことも大事かと思う。ぜひ具体化をお願いしたい。

学校の魅力発信として、保護者に加えて企業、地域社会から期待や評価されていることをPRすることと併せて、地域社会が学校の取組を支援し、内外に発信していくことが重要だと思う。南丹高校テクニカル工学系列の地元企業、地域と連携した交流やインターンシップへの支援、須知高校のウィードの森と連携したイベントの開催、振興局で開催している観光プランコンテスト、これは多くの地元高校に参加いただき、本年度は北桑田高校、昨年度は須知高校がグランプリを獲得している。こうした地域振興の取組も、積極的に企画し、PRを進めている。2月の府民だよりでも南丹高校のものづくり体験イベントの紹介や須知高校におけるウィードの業績を称える資料館のオープンを記事にし、より多くの府民の方に広く紹介したいと思っている。地域の学校の生徒の活躍を地域社会全体で積極的に支援し盛り上げていくことで、各学校の魅力が高まり、選ばれる学校になっていくのではないかと。また、須知高校に関してはホッケーをはじめ、隣接するトレーニングセンター、丹波自然運動公園の機能を活用いただき、ぜひ先進的な取組を検討いただきたいと思う。こうした取組によって他にはない強み、魅力発信ができるのではないかと。

- この間、北桑田、須知高校の在り方検討会議においてそれぞれの地域から貴重なご意見をいただく中で、校長が私案として提案させていただいたことに支援していただいております、口丹の府立校長会としてありがたく思っている。

ただ、今年度の進路希望状況を見ると、先ほど魅力発信のPR不足ではないかというご指摘もいただいているが、残念な状況である。府立高校においてできることがまだある、という観点で教育局とも相談し、PTAともタッグを組んだ新たな取組について協議しているところである。このように、地域の方々からご意見をいただくことは府立高校としては本当にありがたいことであり、北桑田、須知高校だけでなく、他の府立高校にもご意見をいただき、それぞれ学科の改編や魅力化の取組に踏み込んでいきたい。

農芸高校においては平成6年に学科改編し、平成24年に学科群としての募集に変えて以降は大きな改編は行っていない。教育内容として新たな技術、知識は導入しているが、これが本当にこれからの農業の後継者、関連産業のスペシャリスト育成にふさわしい内容かどうかは校内で継続的に検討しているところであり、ぜひ業界、あるいは地域の方々からのご意見を積極的にいただきたいと思っている。どの学校長も同じ思いだと思うので、ぜひとも引き続きお願いしたい。

- 北桑田高校が本当に変わってきたことを実感している。これまでの校長の努力もあると思うが、特に今年は、小学生を招いた夏休みの学習支援等の取組も含め、小・中学生にとって魅力ある高校にしていこうという努力が見える。学校長の活性化私案にある、こんな魅力ある高校にしたいという思いを受け、地域としてもバックアップしようと寄付を募り、美山、京北の方々が高校存続のために努力されていることに敬意を表したい。

魅力ある学校にしていくことと、学校に通える条件を整えることの二つが必要だと思う。北桑田高校への通学について、バス代が高いために祖父母が孫を送っていく光景をよく見かける。また、1時間ほどかけて自転車で通う子もいる。京北トンネルができたとはいえ、往復2時間の自転車通学は大変だと思うが、京都市域の高校よりは北桑田高校の方が近いと通っている。もし北桑田高校がなくなれば、子どもたちが教育を受ける機会の均等は失われると思う。魅力ある学校に向けて学校が努力をし、地域もバックアップしているのだから、生徒が通える条件をつくるのは行政の責任ではないか。寮をつくる、バス代を補助するといったことを考えてい

ただが必要があるのではないか。京北出張所を中心に下宿を斡旋したりしていただいているが、一層の支援をお願いしたい。

- 府教育委員会には須知高校の在り方検討会議において地域の多様な意見を聞いていただき大変感謝している。地域の子どもの学びをどう保障するかということと、学校が地域にとってどのような役割を果たすか、という点について、京丹波町でも考えてきたところである。少子化の中で持続可能な活力ある町、地域を維持するために、町として現在学校を核とした地域創生を推進している。そのため、須知高校に関しては町としても早くから課題意識を持っており、府の検討会議開催以前に「京丹波町における須知高校のあり方懇話会」を町長の諮問機関として設置した。そこでいただいた提言として、須知高校は、通学の利便性の問題等から京丹波町の全ての子ども的高校教育を受ける権利を保障するためにはならないものであり、持続可能な高校としていく必要があること、とある。また、まちづくりの点において、京丹波町は農、食、林などの第一次産業を基盤としたまちづくりを進めており、京都府農牧学校以来の歴史と伝統を持つ須知高校がパイオニアとしてまちづくりの方向性を示し、人材を育成してきたという中核的役割を、引き続き果たしてほしいということである。

町としては、この方向に向かって須知高校とタッグを組み、持続可能な学校づくりを進めるべくこの間取組を進めている。検討会議においては、須知高校から校長私案として具体的な提案をされており、町としてはこれを積極的に支持し、一緒に具現化していく立場をとりたいと思っている。須知高校が今後、持続可能で町の中学生の進路保障、そしてまちづくりに資する高校として存続するための一つとして、調理師免許が取得できる食物調理科などは魅力的だと思うし、町外からも多くの方に志願してもらえるのではないか。すでにモデルとなる三重県の相可高校、北海道の三笠高校に町も視察に行き、実現可能で持続可能だと実感している。ぜひ府教育委員会には具体化をお願いしたい。

また、地域の子どもの学びの保障として、多様なニーズに応える大学進学やしっかりと知識や技術も習得できる普通科について、町としても積極的に協力したいと思っている。町では須知高校活性化協議会を設置し、地域の企業等と須知高校がコラボした活動への支援や、通学に関して町営バスの半額補助の予算措置など、可能なことは行っているが、他地域から来ていただくために、寮や通学バスの整備などもぜひ検討いただきたい。そうした諸条件をしっかりと保障すれば、須知高校は持続可能で期待に応えられる高校になるのではないか。これは町の課題として進めたいと思っており、府でも地域から出された多くの要望や意見を取り入れていただくようお願いする。

- 口丹通学圏の各高校、分校、特別支援学校を含め、南丹市の中学生にとってはどの学校も貴重な進学先であり、一つもなくなってしまうところはない。どの学校にも歴史があり、それに裏打ちされた教育が脈々と今日まで受け継がれており、その充実に向け各校で努力されていると考えており、まずは各校の一層の教育の充実を求めたい。先ほどからの意見にもあるように、全国どこでも人口が減っていく状況にあるため、どの地域も人口減少を前提とした考え方が必要だと思う。生徒が減っていくことを前提として教育を充実させる。教育を通して一人ひとりの生徒の学びをより確かなものにし、人口が少ない社会を少ない人口で担えるだけの生きる力をしっかりと培っていく。このことが教育関係者に課せられた使命と責任ではないか。例えば、今年の進路希望状況の総計を見ると、口丹地域から他地域への進学志望者が250名近くいる。他地域から当地域の高校への希望者は65名と出て行く方が多い。志願が当通学圏の中に向いていくよう一層努力し合うことが大事ではないか。したがって、見かけの生徒の動きに目を奪われることなく、地域の生徒が地域や高校の魅力に惹かれて学びがいを感じる教育を実現していく、とりわけ北桑田、須知高校

においては当地域の特性を十分に取入れた教育を一層進めていくことが最大のテーマではないかと考える。教育には、子どもの育ちを通して地域社会を維持、発展させていく大きなミッションがある。地域の高校教育の充実を図ることを通して、当地域の主体者を育てていく気概を互いに持ちたいと思う。そのためにも、ぜひとも高校、支援学校を含めて、地域全体で学校を支える仕組み、学校運営協議会の導入を検討いただきたいと思うし、地域や学校の特性を十分踏まえた教育施策の充実をお願いしたい。私どもも義務教育の分野で積極的な教育の推進に努めていきたいと考えている。

- 各校の特色化が図られることを前提としてであるが、通学圏という枠組がかなり制度疲労を起こしてきているのではないかと。例えば北桑田高校について、地域の子ども数と普通科の募集定員を比べると収容比率が100%を超えており、希望すれば全員が入学できる実態にある。亀岡から北桑田高校に通うのは寮等の条件が整備されなければ難しいであろうし、このまま口丹通学圏において北桑田高校が存続していけるのだろうかと思う。やはり京都市とどう連携するかをもっと重視していかないといけない。北桑田高校のある京北地域は京都市であり、他の京都市域の中学生は市内の20数校の中から高校を選択できるが、京北地域の中学生は北桑田高校しか選べない。同じ京都市民である中学生でこれほど差があって本当に良いのかということ議論しないといけない。亀岡からは4割近い子どもが京都市内の高校に通っているが、普通科では地域の子どものためには実質的に亀岡高校しか選択肢がない。園部高校普通科を希望する生徒も若干名いるが、定員100名のうち20%の生徒しか他地域から入学できない制度になっている。例えば、美山地域や京丹波町からも園部高校に行きたいという生徒がいる場合、それを受け入れるだけの定員はなく、実質的な選択肢はない。このため中学生にとって魅力のない地域と思われてしまい、亀岡に住む保護者の方々は子どもの選択肢を広げようと転出されることになる。去年の実績を調べたが、京都市内に住所を移しているケースが10、20件どころでなくかなりの数であった。

亀岡市では空き家対策など人口増に向けて対策はしているが、このように中学生の進路選択の幅の狭さというものを感ずると、京都市内に住んでいる子どもから見れば、魅力のない地域になっていると思う。通学圏制度や学区の20%の枠組などは、おそらくそれぞれの高校を守るためにつくってきたものだと思うが、このまま制度を維持するだけでは、他地域からの子どもの受け入れも20%枠で抑えられ、結局ギリ貧になってしまう。北桑田高校では今回の選抜から京都市・乙訓通学圏から6名まで受け入れることが可能となったが、守りから攻めの姿勢にどこかでシフトしていかないと、募集定員の確保はますます困難になってしまう。口丹地域だけがどの高校も定員割れして、保護者から定員割れの数字を見ただけで、信頼できない学校と受けとめられてしまう現実を考えると、今後、相当なテコ入れが必要だと感じている。通学圏という枠組など制度そのものについて、きちんと議論して見直していかないと、各校が努力しても制度の縛りによって多様な取組ができなくなっているのが現状だと思う。

- 制度の縛りについて意見があったが、このことは考えていかななくてはならない。ただ、京都市内へのアクセスが便利な高校とは違い、北桑田、須知高校などでは交通費や通学時間がかかるため、特別な対応が必要な部分もあると思う。森林リサーチ科について全国募集という意見があったが、地域における高校の重要性に関して、地域の範囲をどこまでで捉えるのか。口丹以外の地域も含め、府として今後森林リサーチ科をどうしていくのかも踏まえて施策を考えてほしい。「森の京都」というフレーズがあるが、やはり他府県ではなく京都でやるべき森の施策があり、森林リサーチ科はその意味で重要な要素を占めていると思う。全国募集にすれば寮の問題などが出てくると思うが、京都市でもできることはしていきたいと思っているので、

協力しながら進めていきたい。

- 私立高校でも公立と同じ悩みがある。生徒数の減少傾向を見ると、私学がこの地域で続けられるのかと常々悩んでいる。私学の場合、まず経営面を考えなくてはならない。先ほど出ていた調理師免許の取得なども検討したことがある。しかし、設備投資、人件費がかなりかかるため難しいと判断した。福祉科については今年から廃止することとした。コースを立ち上げた際は50名いた生徒が、現在は12名となり、経営上続けられないと判断したものである。また、生徒募集についてだが、私学にとってはこれが命であり、現在、全学年の定員は440名だが、充足率は8割ほどである。口丹地域からの志望状況としては、看護科では口丹地域から2割で後は京都市、宇治市及び城陽市、遠方では滋賀県からも来ている。寮があった時もあるが、寮生がどんどん減り存続が難しくなった。普通科では40名募集のうち半数が口丹地域から来ており、ほかは京都市など府南部から来ている。他地域から生徒を呼ばないと存続できないのが現状である。学校の特色については、多様なコースの設定が経営的にも厳しい中でできるだけ他校と差別化を図っているが、普通科については難しいと感じている。現在は5つほどコースを設定しているが人件費もかかり悩ましいところである。公立高校には生徒指導の関係や部活動などで協力していただきありがたいと思っており、今後とも、公私ともに存続していけたらと思う。

ただ、私学の立場としては、公立高校の募集定員数は生徒数減少に合わせて調整をお願いしたい。高校の統廃合は他府県ではかなり進んでいるが、京都はほとんど進んでない状況である。通学事情など地域的な状況からなかなか難しいとは思いますが、お互いに切磋琢磨しながら存続していけることが、地域の活性化に資するところもあると思う。人の減少はどうしようもないため、地域の活性化に向けては、企業誘致をいただくなど行政の取組を引き続きお願いしたい。

- 高校教育の成果として、地域振興に関わる人材の育成という観点は非常に重要だと思う。今から30年ほど前に中学3年生数がピークであったが、今はその半分に減り、その一方で高校の数は変わっていないという現実がある。1校当たりの生徒規模も小さくなり、教育面での課題が出てきていると思う。高校生の力を伸ばすことは地域創生にとって非常に重要だと思う。そのためには、一定規模の集団の中に身を置き、勉強や部活動で競い合えるライバルがいる中で、切磋琢磨していくことが必要である。やはり一定の生徒規模を維持することがとても重要だと思う。極端に言えば、高校の数を半分に減らせば30年前の規模に戻らと思うが、実際には通学時間、費用面、地域性もあり、存続しないといけない高校も多数あると思う。府においてはその両面を踏まえた上で、府北部地域の振興に関わる高校生の育成に資する良い方向を示してもらえたらと思う。

- 北桑田高校、須知高校については検討会議において様々なご意見をいただいた。北桑田高校においては、校長活性化案も含め、ご理解、ご支援のお言葉をいただいたことに対し、この場を借りて感謝申し上げたい。一連の検討を通して、改めて地域に支えられている学校だと感じており、頑張っていかなければならないという思いである。募金活動も進めていただき、本当に感謝の言葉しかない。元々は、地域の子どもたちは特にPRしなくても本校に来るという流れがあったと思うが、少子化が進み、通学が不便な中で定員割れが続くという状況が起こってきている。交通が不便な中でどうやって本校を選んでもらうかであるが、専門学科は一定特色を打ち出せるが、普通科としては進路保障や部活動等で特色を出していくことになると思っており、様々なアイデアを考えながらも目先の取組にならないようにしていきたい。そして、高校だけで進めていくのではなく、地域があってこそ高校の存在価値があると思っている。どのように工夫しながら地域活性化と高校の発展を進めていけるかという視点で考えていきたい。



本校をPRして回った際に、通いにくいので寮に入れないのか、という声を聞く。しかし、ただ単に寮をつくれれば良いわけではなく、地域への効果も考えなければいけないと考えている。現在、地域には下宿のお願いや空き家対策などの話をしており、地域と一緒に考えていくことが大切だと思っている。なお、今回の選抜から普通科において京都市・乙訓通学圏から新たに定員10%（6名）の枠が創設された。希望は6名以上あったが、前期選抜しか受けられないとか、寮に入れるかどうかで迷っている生徒もあり、森林リサーチ科に進路希望を変えた生徒もいることから、最終的にどうなるかは不確定である。今回の状況も見ながら考えていきたいと思う。

それから、来年度の府教育委員会の予算案として、ふるさと納税での府立高校支援が打ち出されている。本校では募金等の支援をいただく形で現在進めていただいているが、一方で府としても方策を考えているということで、詳しく説明があればありがたい。

また、美山分校については、口丹地域で唯一の定時制高校として、多様な生徒を受け入れている存在意義は多くの方に認めていただいております、ありがたく思う。地域に根付き、地域の方に受け入れられている学校だと感じているが、現在、校舎の老朽化が進み体育館も使えない状況で、教育環境が万全でないのも事実である。その点や交通の利便性も踏まえて、美山分校の機能をどう維持していくかということを考える必要がある。

- 先ほど京丹波町から須知高校を持続可能な、地域の核とした地域創生の高校へ、というご意見をいただいたが、本校は京丹波町から大変支援をいただいている学校である。魅力ある高校づくりに向けては、食物調理科という学科新設といった抜本的な改革を掲げさせていただき、生徒が少なくなる中で他地域からも生徒を呼び込める具体的な方策を考えたところである。一方で、地元地域の生徒を責任を持って育てていく観点から、高校があるべき姿をお示ししていく必要があり、普通科の特色ある学習を進めていくことも考えている。さらに、部活動の活性化として、本校のホッケー部は、今年男子がインターハイ、全国選抜ともに2年連続で全国大会に出場できた。女子についても、来年度有望な生徒が入学してくれることを願っているが、さらに強化していくためにも、普通科で他地域、全国から生徒を呼び込めないかと考えているところである。近隣の県では高校に女子のホッケー部がないところもある。そうしたところから本校に来てもらって活性化させていきたいと思っているので、ご支援をよろしくお願ひしたい。

- 高校から少し幅を広げて、府立学校の在り方として意見を述べたい。丹波支援学校には丹波地域支援センターを設置し、保育園児から高校生に至るまで、障害のある子どもの相談に対して支援する取組を行っている。平成29年12月までの間に、各校種から82件ものご相談があった。そのうち口丹地域の高校からは、全体の21%に当たる17件の相談があった。先ほど美山分校の役割という話があったが、高校においても本当に様々な障害のある子どもが通っている状況にある。

現在、全国的にインクルーシブ教育システムとして、障害のある子どもと障害のない子どもと一緒に学んでいこうという教育が提唱されている。山城地域では八幡支援学校と京都八幡高校が同じ敷地にあり、障害のある子どもと障害のない子どもと一緒に頑張って勉強しようとする様々な交流を進めている。また、新しいシステムとして、これまで小・中学校にしかなかった通級指導教室が、平成30年度からは高校でも設置できるという段階になっている。府でもモデル校をつくって進めていこうという時期に来ているが、口丹地域においてはどうしていくのかも考えていく必要があると思う。その際、丹波支援学校の在り方も含めて、どう連携をしていくのかという視点がないと、高校の在り方も定まっていけないのではないと思う。私自身も具体案がない状況であるため、様々なご意見をいただきながら良い形がくれたらと思っている。



○ 地域に高校があるというのは子どもにすれば当たり前のことと感じていると思う。高校生が身近にいて、様々な影響や希望を与えてもらったりするのは、キャリア教育の観点からもとても重要なことだと強く感じている。小中高連携の取組で高校生に勉強を教してもらったり、部活動の指導をしてもらったりする中で、「こんな高校生になりたい。」という憧れを強く持つ子どもはたくさんいる。また、小学校でも地域に学ぶ取組をしているが、地域に触れる学びはすごく大事だと思う。子どもたちはその中で有用感や達成感を味わうことで、地域に関心を持ち、地元の高校として地域貢献したいと考えるきっかけになるのではないかと思う。今後もそうした取組を大事にしていきたい。

○ 生徒数の減少に伴い、高校が存続していくためには通学圏の検討等は必要なことだと考えている。

また、例えば、子どもが小学校段階で抱いていた将来の夢が、大きくなった時の現実とは違っていることはよくあると思うが、最近はインターネットの普及などの影響か、実現可能な範囲のことを夢として文集等書いている子どもが多い気がする。そういう意味で、小学校の保護者に対して早くから口丹地域の各高校では多様な進路の実現に向けて魅力ある取組をしていることを発信していただき、小・中学校段階から地域の高校の魅力をしっかり知っていただいて進路の選択肢として考えてもらう状況をつくっていくことが大事ではないか。

また、小学校の教員で、口丹地域の各高校の様々な取組や魅力を知らずに日々子どもの指導に当たっている者も多いと思うので、幼小中高連絡協議会などを通じて小学校教員に対する啓発などを今後行っていく必要があると感じた。校種間で連携し、口丹の高校の在り方について今後もしっかり先を見据えて考えていく必要があると思う。

[閉会あいさつ]

関係者の方々から貴重なご意見をたくさんいただき感謝申し上げます。少子化は学校教育にとって非常に重大な事態であるが、その中で何とかこの地域で力を合わせて、私どもも一緒になって努力し、乗り切っていく、子どもたちの教育をしっかりと守っていくという方向で、今後さらに検討を進めてまいります。

年度末には口丹地域の高校の在り方について、一定の方向性をお示しする必要があると考えており、いただいたご意見を持ち帰り検討したい。今後とも少子化は一層進んでいくため、引き続き、必要な検討を行っていく所存である。

本日はありがとうございました。